

令和6年8月24日

南の風パリ五輪女子日本代表特集号Ⅳ

南部地区ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

パリ五輪女子日本代表が予選突破ならなかった要因を書きます。あくまで私見です。

まず世界の女子バスケのレベルアップが、相当進んでいたことが前提にあります。

《要因1》

東京五輪で日本が銀メダルを獲得したことで、「他国から研究し尽くされていたこと」が挙げられます。ドイツ、ベルギーは日本のプレスティフェンスに対して、パスによる球離れを早くしてディフェンスに捕まらないようにしていました。ボールを素早く動かす工夫をして、日本がプレスに来る前にボールをさばいていました。こうなると日本はさらに運動量を求められ、いくらスタミナを強化して運動力とスピードを武器にしたとしても、疲労から3Pシュートの成功率は下がります。運動量をキープするために、恩塚ヘッドはタイムシェアして選手を交代させていましたが、やはり限界はありました。

また日本の強みである3Pシュートへの対応（キックアウトやエキストラパス）も早く、タフショットになるケースが多かったです。さらに東京五輪では、日本のピック&ロールに対してスイッチで対応して来た他国に対して、日本はスピードのミスマッチを生かしたペイントドライブで崩す戦術も、素早いローテーションでゴール近辺でショットブロックされる場面がかなり見受けられました。

《要因2》

恩塚ヘッドは就任以来「セットプレーに頼るのではなく原則にしたがって、一人ひとりが判断してプレーする」という、ゲームモデルに即したコンセプトを掲げました。そしてOQT（オリンピック最終予選）を突破した後は、「プレー選択を無意識に瞬間的にできるように、体の芯に入り込むように取り組んでいる。戦術を『どうするんだっけ』と考えているのは相手をやっつけることはできない。習慣化して無意識な感覚をもって、闘争本能につなげていくことを大事にしていく」と話しました。

私はこのコンセプトに沿った戦略は、「バスケットボールの究極を目指している」と思いました。ただこれが強豪国相手に定着するには、どのくらいの時間が必要なのかとも同時に感じました。

そしてパリ五輪では、この戦略・戦術が、世界が対策を練って来た中でどのくらいブラッシュアップできたのか？ また日本の生命線として、3Pシュートを決め切ることでできる『個の能力の育成』がどのくらい磨けたのか？（打つタイミングやシチュエーションも含めて）が検証されなければいけないと思いました。

《要因3》

「たら、れば」を言っても仕方ないのですが、山本 麻衣選手の欠場は本当に痛かったです。

3Pシュートにスペシャルな能力があり、初戦のアメリカ戦では、5本の3Pシュートを含む17得点、5アシストという活躍ただけに惜しまれます。（脳震盪後の健康上の規定により欠場）

最後に恩塚ヘッドは、「私に足りない部分を選手たちがフォローしてくれながら歩んだ3年間でした。選手の頑張りを一番身近でみてきたからこそ、勝利に対して私が貢献できなかったことを、申し訳なくその責任を感じています。ただ私の力不足でしかなく、選手たちは本当によく戦ってくれました」と語りました。次号ではロス五輪に向けて、日本の女子バスケの方向性に触れてみたいと思います。